報　告

第34回日本臨床環境医学会学術集会を終えて

平　久美子

第34回日本臨床環境医学会学術集会　会長

2026年６月27日（土）、28日（日）に東海大学伊勢原キャンパス医学部１号館２階A講堂において第34回日本臨床環境医学会学術集会を無事に開催することができました。当初、千葉での開催予定でしたが、途中の会長交代に伴い開催地が変更されました。

今回のメインテーマは『シン・ワンヘルス』としました。ワンヘルスは「ヒト、動物、環境にとって最適な健康を達成するために、地域、国、世界的に取り組む複数の専門分野の協力的な取り組み」を求めるアプローチを指す言葉です。本学会は1992 年の設立以来、環境に関連した健康問題について多分野の専門家が協力して取組み、解決への道筋を示してまいりました。そこで、私たちのこれまでの協働のかたちをワンヘルスの観点から見つめ直し、一層の社会貢献を目指し、議論を深めることを目標といたしました。

開催前日に台風７号と８号が本州を窺い、深夜に震度４の地震が起きましたが、会場への交通が大きく妨げられることもなく、２日間で121名の御参加を頂きました。プログラムは、招待講演３題、教育講演５題、一般口頭演題18題、一般ポスター演題13題の講演及び発表、分科会シンポジウム１題、企業共催シンポジウム１題、ランチョンセミナー２題、市民公開講座２題の構成で、充実した学術集会となりました。

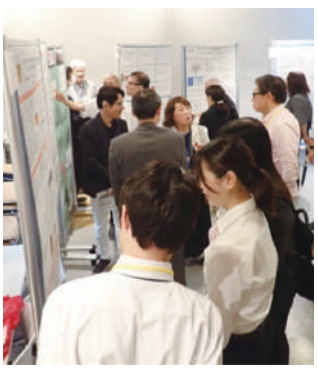
メインシンポジウム「ワンヘルスとこどもの未来」では、まず招待講演として、北海道大学One Health リサーチセンター池中良徳教授に「One Health アプローチから考える農薬問題―化学物質曝露と人・動物・環境の健康をつなぐ視点―」、一般社団法人 Back to the Nature 代表理事山室真澄先生に「失われる『生きものの環』と飲用水の安全 ―農薬が変えた水環境の過去と現在―」、神戸大学大学院農学研究科星信彦名誉教授に「食品に潜む農薬の安全性とリスク評価の仕組み～みえない脅威とどう向き合うか～」の３題、次に教育講演として、環境過敏症分科会推薦による横浜市立大学名誉教授横田俊平先生の「若年性線維筋痛症からみえてきた「視床下部症候群（脳室周囲器官制御破綻症候群）」の意義～ 臨床症状から環境過敏症の責任病巣を考える ～」、最後に子どもの健康について一般演題３題の発表が行われ、活発な質疑応答がなされました。

病院・高齢者施設環境分科会シンポジウム「病院施設の空調・換気の現状と課題」では、６人の専門家から空気を介した感染対策のための空調換気設計の必要性について問題提起がなされました。また企業（フィリップモリスジャパン）との共催シンポジウム「改正健康増進法下における加熱式たばこ使用環境の管理と曝露評価」において、製品の性能と健康影響についての意見交換を行い、ランチョンセミナーでは、ニプロ株式会社/一般財団法人機能水研究振興財団の共催で高純

度次亜塩素酸水、株式会社MTGの共催で機能水についての解説をいただきました。

その他の教育講演として、環境アレルギー分科会推薦によりNPO 東京アレルギー・呼吸器疾患研究所白井秀治先生から「住まいのアレルギー対策」啓発ポスターの作成の経緯について、国立病院機構横浜医療センター釣木澤 尚実先生から「呼吸器疾患における環境整備の有用性」をお話いただきました。また会長企画の教育講演「脳研究最前線―腸脳相関と PET」では、今後の化学物質過敏症の病態解明につながるものと期待される考え方や技術の紹介として、近畿大学医学部渡井健太郎先生から「腸脳連関と化学物質過敏症」、量子医科学研究所山本保天先生から「PET で脳の中の変化をとらえる」のお話をいただきました。それぞれ会員全体で共有すべき部分について演者から詳しい抄録をいただきました。最後の締めくくりの市民公開講座「中枢性感作症候群と化学物質過敏症」では、厚労科研班研究班長の獨協医科大学医学部小橋元教授が「種々の症状を呈する難治性疾患における中枢神経感作の関与について」、東京女子医科大学附属足立医療センター平久美子が「化学物質過敏症の新しい考え方」の講演を行いました。あいにくの雨で市民参加は３名に留まりましたが、学会参加された患者さんを交え活発な議論がなされました。

懇親会は、東海大学付属病院「サンデー」にて、50名超の参加をいただき、和やかながらも熱心な意見交換が随所で行われ、台風一過の美しい夕日を眺めながら楽しい時間を過ごすことができました。

本学術集会の会長賞は一般演題より公益財団法人ルイ・パストゥール医学研究センター井上一彦先生の「福島原発事故により放出されたストロンチウム 90 のヒト乳歯、第三大臼歯への蓄積に関する研究（被災牛との比較）」、奨励賞は、広島大学大学院医系科学研究科大黒亜美先生の「香料による脳内ミクログリア活性化の作用解析」に授与されました。受賞された方々の研究の今後益々のご発展を祈念いたしております。

２日間の会期を無事に終えることができたのは、ひとえに理事の方々、お越し頂いた参加者の皆様のおかげです。そして学術集会の運営に直接携わって頂いた副会長の寺山隼人先生、実行委員長の清島大資先生、副実行委員長の永堀健太先生、実行委員の石渡尚之先生、上田容子先生、大森百合香先生、佐藤勉先生、鈴木恵先生、高木美穂先生、田中とも子先生、古谷祐生子先生、村田貴俊先生、山田悠輔先生の献身的なご尽力によるものです。この場をお借りして感謝申し上げます。ありがとうございました。